



俳優・歌舞伎役者

香川 照之さん

どんな役を演じて、その凄すぎる演技で圧倒的な存在感を感じさせる香川照之さん。3年前には市川中車を襲名され、歌舞伎俳優としても活躍されています。役作りはどのような背景から生まれてくるのか、歌舞伎界への進出にける思い、弁護士に対して期待することなど、熱い思いを率直に語っていただきました。

(聞き手・構成：湊 信明、佐藤 光子、西川達也)

——大学在学中のころから、テレビ局でADとしてアルバイトをされていたということですが、最終的に俳優として生きていこうと決められたというのは、いつごろだったのでしょうか。

大学4年の皆が就職活動をしている夏休みですね。当時は大学4年の夏休みからで十分就職活動が間に合うという時代でしたけれど、もう僕は会社勤めはしないと、できない、スーツは着られないというふうに何となく決めていたので。母親がよく知っているプロデューサーのテレビ局でADをやって、ただ、役者をやるといふに決めた上でADをやっていました。

——そうしますと、俳優になることを決められてからテレビ局で働くようになったということですね。

そうですね。資格がない仕事なので、今日なりますと言った瞬間なれるという恐ろしい仕事です。その意味では、後々こういういばらの道が待っているとは、その当時は思いもよらなかったということですね。

——テレビや映画、CMなどで大活躍されていますが、出演作のリストを見せていただくと、本当にいずれも話題作やヒット作ばかりです。おそらくオファーは殺到されているかと思うのですが、どの仕事を選ばれるかという基準はあるのでしょうか。

この20年以上やってきた中で、仕事を選ばせていただく何かがあるとすると、単純ににおいですかね。直感です。それが光に包まれているようなにおいがあるかどうかですね。つまなくても、小さくても、かわっている人だったりとか、共演者もそうかもしれないし、監督もそうかもしれないですけど、健全な、明るくて、しっかりと一生懸命何かをやるという、その努力を惜しまないというような、いずれ光が当たって、引き上げられるような努力をしているような集団の仕事に対しては、引き受けようと思いますね。

——そうしたものは、やはり日ごろから、その人の仕事ぶりなどを観察されているのでしょうか。

そうですね。でも、そうでしょうお仕事って。一緒に仕事をして、この人はこんな人かって、見た瞬間に分かった通りになる。そうじゃない例外もあると思いますよ。いいと思った人が悪い、悪いと思った人がいいということもあると思います。ただ、たぶん弁護士と依頼者の関係と同じで、何となく、その人が努力をしているか、あるいは逆に僕がかかわることで、その集団を引き上げられるようにしたいと思うかが、仕事を選ぶ第一の、そして最終的な原理のような気がするんですよ。

——弁護士の仕事ともつながるところがありそうですね。

絶対そう思いますね。対人間ですから。もう一步言えば、今は何が来ても、僕がかかわることによってよくするという、その責任があるということですかね。それが僕の今の立場での責任だと思うんです。若いころには、こういうのはもちろん分らなかったですけど。

——テレビでは、最近では『半沢直樹』の大和田常務役が世間の印象に残るところですが、役作りはどのようになさっているのでしょうか。

歌舞伎では鏡の前でやったりすることもありますけど、テレビや映画に関して言えば、役作りというのは実は何もしてないです、もう。まったくしないです。

単純に台本を読んで、その場で起こる一番つらい、こっちに負荷がかかることは何かというのを探すんですよ。台本の中で、例えば僕の演じる登場人物が、窓ガラスを割るということは書いてなくても、その人間が窓ガラスを割る可能性なんかをずっと想像しながら。そして、その場で一番つらい、きつい、痛い、我慢できないということを役者が率先してやる。それによって、スタッフがついて来ると思うんですよ。

役者というのは、先頭に立って胃袋を広げる役割だと思っているんですよ。僕にとって役作りというのは、そういうことですね。台本を読んだときに一番きつい、きついというのは自分にとってですね。一番取り返しがつかない、ケチャップをそこにばらまくとか、その辺をめちゃくちゃにぶち破るとか、そういう取り返しがつかない一番きつい状況を想定して、そこから引いていくということが役作りですかね。

個人の問題ではないですね。この役はこういう役で、そこに入っていくとかという個では動いてないです。もっと集団を良い意味で狂気と言えるような状況に持っていくために僕はどうするかという、そういうイタコみたいな存在だと思っているので。

——では、あの有名な土下座のシーンも、特に練習したわけではないのですね。

ないですね。僕の中では、ああいう人というのは、

土下座するすると言っておきながらしないんです、絶対に。逃げまくるんです、いろいろな手を使って。監督に最終的に土下座しないというのはありますかという話もしました。

でも、平行線をそのまま押し進めたらドラマは終わらないので、監督がやっぱり土下座をしてくれと。何回か前に堺雅人さんが僕に土下座する逆の構図として、やっぱり最後に大和田が頭を下げることによって終わってくれと。

じゃあ、絶対土下座をしない人が土下座するとどうなるかと僕は思ったわけです。そうしたら、あれは実際編集していますけど、土下座をしかけてから最後まで3分ぐらいかかっているんですよ。土下座を絶対にしない人がしたらどうなるかというのを考えてやると。歌舞伎をやったことによって体力的なことだったり、芝居的なこともどんどんダイナミックさが身に付いてきたので、映像だけをやっているときの創造性とはまったく違う方にエンジンが入って、ああいう演技になったとは思っていますけどね。

あのシーンは、台本を読んだだけで、一番きついことが何かっていう先ほど申し上げたことと、土下座を絶対しない人がしたらどうなるかという、もしかしたらその2つぐらいであれができていますよ。

——すごいですね。

シンプルで数の少ない方向性ですね。ゴルフで打つときも、いろいろぐちゃぐちゃ考えないで、ワン、ツー、スリーで打っている方が実はいい結果を残したりするように。

ただ、いつも自分の心臓の鼓動だったりとか、過呼吸になったりするという限界までやるつもりではいます。そうじゃないと切り取る意味がない。ドラマ、ドラマツルギーというのは、あるいはドラマチックってそういうことだと思うので。

——表情を練習されたりはしないんですか。

しないですね。あのドラマでは、よく表情、表情と言われましたけど、僕の中では「悔しい」とかそういう

気持ちそのままです。これも歌舞伎の影響ですかね。歌舞伎は顔の筋肉を動かして、3階席に見えるようにしますので、さらにこうなったという感じです。

——「やれるものならやってみな」というあの表情は、こうして紳士的に話されている香川さんの中にあるとは思えないのですが。

僕の中にあれはあるんですよ。例えば「0を100倍にしても、0は0だよ、半沢君」とか、いろいろなアドリブをあのドラマの中で言いましたけど、「やれるもんならやってみな」というのも、あの言い方に落ちていたのは、やっぱり僕の中にある皮肉性とか、意地悪さとか、悪の気持ちなんですね。

役者というのは、ないものは出ないんですよ。それは、弁護士の方が裁判所でやられるときも、「違うな」と思って言っていることは絶対に伝わらないと僕は思うんですよ。本当にそう思って言っていることが裁判官を突き動かしていく。僕の理想論では芝居というのも一緒に、やっぱりないものは出ない。逆に言うと、出たということは、それが僕の中にあるんですね。

——まさしく鬼の形相も、鏡で練習するとかではなくて、自然にわき出てくる。

練習というのは、まったくないです。自分の中での一番、100%に向かっていくだけですね。常に100%をやるという癖が付いてないと僕はできてないと思うんです。60%で終わりとか、40%でいいかなと生きている人では、なかなかそうはならないと思うんです。

僕は、10年ぐらい前から、常に一番きつい100%に向かうことをやると決めたので、その癖がたぶんこの場でも出てくると思うんですよ。あ、嫌だな、と思うことからまずやってやろうと思っているので、その鬼の形相も、100%というものに瞬時に向かう癖が付いているから出てきたと思うんです。

——同時に何本かのドラマの撮影などが重なったりすることもあるかと思うのですが、それだけ役に入り込まれていると、別の現場に変わったときにさっと変わるものでしょうか。

変わらないということは、まったくないです。歌舞伎なんて、例えば『伊達の十役』なんか、女形にもなったりしながら10個役をやらなきゃいけないわけです。役に入ったら出られないなんていうのはまったくの都市伝説で、そういう役者がいらっやいますけど、僕はそんなことはないですね。

僕は単純に、台本に書いてあることに素直に忠実にやるだけなんです。自分の何か大切なものにしがみつくと、全部自分に粘って自分の味が出ちゃう。自分をすっ飛ばして台本に素直であるということに忠実にいたいですね。

——台本を読んで、事前に作り上げたキャラクターと、現場で監督がこうしてくれというのが違ったりした場合は、どうされるのでしょうか。

もう微妙な修正なので、それも素直に監督の話を聞いて、自分の中にある、ん、あれ、というのを1個見つけるだけなんですね。

キャラクターを作り上げるとか、うねうねした何か抽象的な心の作業ではないです。ん、じゃあ、あそこであれだから、たぶん、あ、この人はあきらめる人なんだとか。具体的で単純な物差しを1個当てることでずいぶん修正されるので、あとは、そう思っただけで変わるとか、ちょっと早く言ってみようとか、単純にそんなことですかね。小さな声で言ってみようとか。

——あとはそれに沿ってやっていけば、もうその登場人物になる。

うん、大丈夫ですね。何よりも僕が疑ってないので。

——撮影などの現場で心掛けられていることはありますか。

その現場を1人でも多くの人が楽しかったと言えるようにすることが役者の責任だと思っています。スタッフだってなけなしのお金でやっているわけじゃないですか。ずっと1日中照明を持っている人とか、マイクを持っている人とか、すごく頑張っていると思うんです。彼らが家に帰ったときに「いや、今日はこういう

役者がいてね、これもう正気じゃないね」というようなことを、1個でもお話としてエピソードを与えられるかどうかです。それはもはや自分の問題ではなくて、僕が役に入るとか、役がどうだとかは、そこにはもうないですね。

ただ、歌舞伎では、今僕はそれはできないです。それこそいっぱいいいばいばいでやっているんです。歌舞伎をやったことのプラスの面として、より恐ろしい世界を知ったことで、誰よりも今は強いのは、負けることを恐れていない、この強さだと思いますね。これは結構な、僕の中ではいい剣が手に入ったような感覚ですね。

—— テレビと映画で、それぞれの演技で気をつけているということ、何か違うということはあるのでしょうか。

違いはまったくないです。気をつけているのは、俳優が1つの感情に飲み込まれ溺れ、ウェットなジメジメした芝居に陥っているときに、そこからまったく対極に飛躍できるかという軽さを持てるかどうかです。サッカーでいう「逆サイドに振る」ということですね。僕が逆サイドに振る。こっちの方に固まってきたなと思ったら、ボールを逆のサイドにボーンっと出してみると何かが起こる。

感情もそうですし、空間もそう。こっちの方に固まっていたら、向こうにがっとう行ってみる。感情ですかね、一番は。ある感情にみんながなりかけると、ふっと笑いを一発ぽんと入れるだけで、また涙に返ってきたりとか。常に、逆サイドに振る。だから本当にサッカーのミッドフィルダーの感じで。ストライカーは主役の人なんです。そいつがいいシュートを打てるように、本当にいつもボールを出している感覚がすごくありますね。僕は今、2番手とか3番手の役で、そのボールを出す役割をやっていますから、そういうのが楽しいですね。映画でもテレビでもそれを心掛けています。

でも、そういうのってどの仕事もそうだと思うんですよ。詰まってくるとやっぱり、そういうふうなアイデアを出す人が一番、場の空気をぐわっと動かすというか。

—— 歌舞伎のことについてもお聞きしたいと思います。今から3年前に9代目市川中車を襲名され歌舞伎の世界に入られましたけれども、どうして歌舞伎の世界に入ろうと思われたのでしょうか。

歌舞伎俳優としては、父のあと僕で代が止まっていたのですが、僕が終わりや終わるだろうと思っていて別に責任も何も感じていなかったんです。ただ、子供が生まれて、ロープが下につながったのを見て、ふっと上を見たときに、あっ、すごくロープが上からつながっているなと思って。

これを僕がずっと持っていて、ぽんと放したら1本ぴゅっと下に行って、それを彼が持った。それで、自分がロープの途中にいるということを認識したところから歌舞伎を意識し始めましたね。

—— お子さんがお生まれになってから意識された。

父はもう病に倒れていましたし、世の中には僕だけだと思っていただけです。しかし、横のつながりから見るとそうですけど、縦というものを初めて見てみたら、父も祖父も曾祖父も、その上も、その上も歌舞伎をやっていて、全部長男でつないできている。それを僕が止める、そんな怖いことはできない。とりあえず息子に責任を転嫁したいから、お前が決める、俺はとにかくつなげると言っただけ。

—— 45歳のときに歌舞伎の世界に入られたということですが、既に俳優としても名声を得て、賞もたくさん取られて、更に新しい歌舞伎という世界に入ることは並大抵なことではないかと思います。お子さまだけが入門されるという選択肢もあったわけですが、ご自身が挑戦されようと思った理由はあるのでしょうか。

答えは、一番きついのはそこだと思ったからです。一番きついのは僕もやる。今までの名声のようなものがあるとしても全部関係ない、次。100%を生きるという癖をずっと付けていたので進めたんだと思います。

それまで僕自身が、あ、ここは手を抜こうかなとか、これは嫌だと思う生き方をしていたら、歌舞伎をや



たぶん弁護士と依頼者の関係と同じで、その人が努力をしているか、あるいは逆に僕がかかわることで、その集団を引き上げられるようにしたいと思うかが、仕事を選ぶ第一の、そして最終的な原理のような気がするんですよ。

香川 照之

らなくていいかなとなったと思うんですよ。何か提示があったときに全部やると決めていたので、歌舞伎というものが出てきたときに、あ、やれということだな、という簡単な公式なんです。あとは、素直に飛び込むだけなので、考えないです、難しいことは。行動が人格であって、ただ行動するということだけなので。

——行動が人格ですか。

口で言う人はいっぱいいると思います。でも、何を行動しているかだと思うんです。行動して一番「まみれている人」しか僕はかっこいいと思わないし、だから僕の周りのスタッフは本当にみんな、行動するやつばかりが集まる。そういう人たちが集まってくるんですね。

——テレビや映画の世界に長くいらっちゃって、歌舞伎の世界に入って違和感はありませんでしたか。

違和感しかありません。

——逆に、テレビや映画のご経験が歌舞伎の役に立ったことは？

それも、ないですね。歌舞伎は映像の方に役に立ちますが、映像の仕事は歌舞伎には役に立たないです。まったく。

歌舞伎の一番は間(ま)ですね。間。間についてはすごく歌舞伎から勉強しましたね。映像の方で、ここで音楽が入るとか、そういうのって後で全部俳優が決めますけど、歌舞伎は音がかかってから1つ間を置いてからセリフを言ったりとか、耳が全部働かなきゃいけないので、歌舞伎の方が、次元が1つ大きい仕事です。2次元の仕事が3次元になっているぐらい気を使いますし、3次元から2次元に下りてきた方が楽ですね。

——歌舞伎での初舞台から3年経ちましたが、最初のころと今とで変わったことはありますか。

いや、もう何もかも変わりましたね。この世界は知らないことがあまりにも多かったのです。あとは、1つには歌舞伎の発声というものが少しは分かってきたというか。発声は子供のころからやっていないとできない。完全に楽器なので。自分の体が楽器であるということは、想像もしませんでした。そういう意味では、歌舞の「歌」の部分だと思うんですけど、そういう体が、3年たって少しですけどできてきたということですね。

——俳優業でのお名前と、歌舞伎でのお名前を今は使い分けていらっしゃいますが、1本でやろうということはお思いにはならないですか。

歌舞伎界の中では、やっぱり市川中車という名前1本でやらないとは何事だという意見はありました。ただ、僕の中では、こんな後で入って、このような大名跡においそれと1本にする勇気も逆にはないですね。いろいろなことがあって今は1本にはできないですけど、こればかりは先例もないことで、周りの方々がいろいろおっしゃってくださるので、時間とともに考えていきたいと思っています。

—— 今までの人生の中で、最も印象に残っている出会いというものがありますか。

息子と出会ったことですかね。年ははるかに下ですけど。

—— 息子と出会うって、あまり言わないですよ。

いや、出会ったんです。この家の、この伝統の、僕が決めたことを、何も疑わずに彼はやっている。僕が見ても彼は歌舞伎に向いていますし、みんながみんな彼の踊りとかを見て才能があると言う。そういうことを考えると、実は彼が決めてきたと思うんですよ。僕以上に。ですから、彼と出会ったことが僕の人生を変えてくれたと思います。

年は下ですけど、同じ日から歌舞伎を始めた完全に同輩でもありますし、同じ日に初舞台を踏んだ2人ですから。共に口上の席で汗をばたばた垂らしながら、彼も「市川團子でございます」とね。

—— 素晴らしいことですね。

感謝、感謝以外の何物でもないですね。彼と出会えなかったら今の僕はないので、よくぞ、この家の跡継ぎとして生まれてくれたと。だからね、彼を守りたいんですよ（笑）。それだけなんです、もう。

—— 今後、テレビでも、歌舞伎でも、何かやってみたい役とか、そういうものは想定されていますか。

まったくないです。やらねばならないことがあるだけで、僕の中には、自分がやりたいなんていう意思はないです。

自分にとって意味がある役、一番きつい役しか来ないので、これがやりたいとかそんなことではやってないですね。歌舞伎については、家の供養の感覚なので、これをやりたいとか、そんな仕事の感覚ではやってないです。先祖の供養として歌舞伎をやっている。家業として。それには、この役をやりたいとかそんなことではないですね。

—— 映像の方はいかがですか。そちらで何かやってみたいとか。

まったくないです。ただ、やらないと、スタッフも困ってしまうので、やるべきことをやる、というだけです。あとは、求められている以上、せめて現場で一番つらいことを私はさせていただきますというような感覚ですかね。何がやりたいとかなんて一切ないですね。

—— これだけ活躍されていると、休む暇もなかなかないかと思いますが、ストレス解消法ですとか、気分転換というのは何かありますか。

歌舞伎役者の先輩が、歌舞伎役者は休みがないと。ただ、毎日同じように動いているので、朝が月曜日で、夜が日曜日だと思っていると。日曜日は何をしてもいいと。そういう意味では僕も、1日の夜が来て歌舞伎から離れると、やっぱりほっとするかなという感じがしますかね。映像の仕事に関してはもう、ストレスも別にないですし、台本を覚えたりするのはストレスですけど、それをつらと思うことは一切ないですね。

ストレスというのは、やりたくないのにやっているということじゃないですか。でも、僕はもう、やらねばならないというところに100%立ったので、やりたいとか、やりたくないとかもう関係ないですよ。やらなきゃいけないことがどんどん目の前に出てくるので、きついと思う仕事しか来ないわけですよ。ただ、その鉄の意志だけは今、幸い健康な体で持たせていただくことができてるので、そこで引き算をしたときに、後にストレスというものが澱のようにこし出されて残るかという、そうでもないですよ。疲れとかはあり

ますけど、それも1杯家に帰ってビールを飲めば、もう飛ぶかなという感じがしますね。何かどこかに行って休みたいとかはありますけど、それも死んでからでいいかなと（笑）。

—— 今（2015年7月）も歌舞伎の午前の公演があって、夜の公演もずっと出ずっぱりで、稽古もあってという生活ですね。

先月、先々月はひどかったですね。5月、6月、7月と全部で8つの役を背負っていたので、5月からずっと朝6時半に起きてセリフを覚えて、明治座に行って3つ舞台をやって、帰ってから6月の演目を3つ稽古して、7月の今やっている『牡丹灯籠』を半分稽古したりとかしていました。ですから、8つの役をずっとやっていて、自分の意思で1日中何もしゃべっていないんですよ。人が書いたセリフしかしゃべっていないんで、僕の意味はどこにあるんだと思って（笑）。

ただ、それでも幸せでした。たぶん今までの人生の中で一番大変だった月の1つですね。受験勉強のときを思い出しましたね、僕。受験勉強でこれぐらいやっていたなと思って。

—— 弁護士に対してメッセージはありますか。

弁護士というと、それこそO・J・シンプソンが無罪になった件のように、金銭的な体力があればいろいろなことが無罪にできて、真実はそうじゃないのに、そっちにねつ造して持っていくことが弁護士の手腕だったりされるような、間違ったイメージもあると思うんですよ。

ただ、実際の弁護士の方とお話をさせていただくと、僕自身も、例えばこういうふうに思うんだけどというのが間違っていると、ちゃんと正してくれる。それが弁護士なんだというのが僕の中では、すごく目からうろこでした。

弁護士の方にはそういったことを通じて、本当に正しいこと、真実というものを探求していつてももらいたいと思います。僕がもし弁護士だったら、人の奥にある真実というものに向かって、ただ弁護をするだけでは

なく、それが依頼者にとっての弁護にならなかったとしても、こういうことが真実だよというのを、お互い依頼者と弁護士の間で確認し合っていきたい。それが、人生にとって真に意味のある時間なんだと思うんですね。

それを僕自身が芝居というものを通じて真実——僕にとっては1人でも多くのスタッフに帰ったときに喜んでもらいたいと思うのが真実ですから——、そこを芝居というそを通して引き出したがっているように、やはり弁護士と依頼者という関係性が、たとえテクニカルな、プロフェッショナルな、何か依頼というものを遂行する仕事上のものであっても、そのお互いが真実というものを共有する気持ちを持てたら、僕はそれは素晴らしいことなんじゃないのかなと思うんです。

—— 大変勇気づけられるお話です。

でも、それは、やっていく上には非常に難しいお仕事だということは重々承知しています。魚屋さんがおいしいものを出すのと、また違うわけですね。これ、うまいよと。それは真実じゃないですか。それとはまったく違う、複雑な要素が絡んでいることは重々承知の上で、そのために苦労されて、皆さん勉強されただんだと思うんです。

それはテクニカルなことではなくて、一握りの人しかできないそういった仕事を通じて真実を共有するということをされたらどうかと。僭越ながら、僕が弁護士だったら、そこに向かう気持ちでいるかなという気はしますね。

—— 本日は有り難うございました。

プロフィール かがわ・てるゆき

1965年生まれ、東京都出身。俳優、歌舞伎役者。1989年、NHK大河ドラマ「春日局」で俳優としてデビューした後、数多くのドラマ、映画に出演し、日本アカデミー賞をはじめとして多数の受賞歴あり。また、2012年には、9代目市川中車として歌舞伎界にも進出し、「ヤマトタケル」などに出演している。その他、ドキュメンタリー番組、アニメーションの声優、CMなど幅広い分野で活躍中。